

性暴力被害者の相談抑制要因の検討
—正常性バイアスが相談意図に与える影響に着目して—
金井志保

性暴力被害の実態には公的な犯罪件数に計上されない多くの暗数があるといわれている。被害者のメンタルヘルスの観点からは、特にPTSD発症に大きな影響を与えることが指摘されてきた。しかし、性暴力被害者の多くは心身の不調や、無力感、不眠、外出の困難などの生活上の変化が生じるにもかかわらず、その体験や生活上の変化について他者に相談しない。本研究では“被害後の生活の異常”に対して生じる認知の歪みとして正常性バイアス (normalcy bias) を取り上げる。正常性バイアスとは、災害社会学者のMcLuckie (1970) が提唱した概念であり、「人々が危機が迫ってくるまでその危険を認めない傾向」とされる。正常性バイアスはリスク認知の感度を下げることによって不安やストレスを低減させるが、同時にリスクの回避を妨げる役割も果たしていると考えられている (広瀬・杉森, 2005)。しかし性暴力被害体験後に生じる正常性バイアスを測定しようとする試みはいまだなされていない。本研究は、性暴力被害後の正常性バイアスの特徴を明らかにした上で、性暴力被害後の正常性バイアスと、メンタルヘルスおよび援助要請の関連を検討することを目的とする。性暴力被害後の認知的作用について着目することは、トラウマへの早期介入やPTSDの予防といった治療方略を検討する際の一助となるだろう。本研究の仮説に関して、援助要請はメンタルヘルスに正の影響がある。また正常性バイアスはメンタルヘルスに正の影響があるが、援助要請には負の影響があると予測する。本研究の調査は愛知県内の大学生187人を対象にWeb上で実施し、場面想定法を用いて正常性バイアスの測定を試みた。また同時に収束関連妥当性として陰性感情抑制を調べた。分析の結果、正常性バイアス得点と陰性感情抑制の関連は見られなかった。しかし陰性感情抑制尺度における感情抑制は「感情を認識しながらもその表出を意識的に抑えること」と定義されていたが、本研究では反応に対する抑制を対象としており、類似した構成概念として陰性感情抑制が適していたかは議論の余地がある。正常性バイアス得点の性質については、より深刻な場面であると正常性バイアスは作用しにくいこと、また男性の方が女性より正常性バイアスが高い傾向が示された。また、援助要請はメンタルヘルスに正の影響を与えており、仮説1は支持された。しかし正常性バイアス得点と援助要請・メンタルヘルスに関連は認められず、仮説2・3は支持されなかった。場面の深刻度は援助要請に影響を与えるが、反応に対する正常性バイアスは援助要請とは関連がない可能性がある。また、メンタルヘルスについては、場面によって正常性バイアスが生じることで正負の影響がでると考えられるため、正確な関連をみるができなかったと思われる。本研究の課題として、測定方法の精緻化が今後求められる。